

2024年8月29日

関係各位

公益社団法人日本学生陸上競技連合
会長 松本正之

競技会の実施における不適正行為について

1 国際武道大学陸上競技部の主催競技会における不適正行為

(1) 判明した事実

今般、国際武道大学が同校の競技場において実施する同校陸上競技部主催の競技会において、以下の不適正行為があったことが判明しました。

少なくとも2014年4月以降、2023年10月まで、以下①～③の方法でレースを実施し計測した記録を、公認記録として記録申請した。

- ① 競技場の公認取得に際して逆走の公認を得ていないにもかかわらず、ホームストレートが向かい風の場合等に、ホームストレートを逆走する方法で、100m及び110mH(混成競技を含む。)のレースを実施した。

具体的には、ホームストレートのフィニッシュ地点をスタート地点とし、100m及び110mHのスタート地点をフィニッシュ地点として実施していた。

- ② 110mHは、「スタート地点から1台目のハードルまでの距離」が「10台目のハードルからフィニッシュ地点までの距離」よりも30cm短いことから、逆走の場合には、すべてのハードルを、本来の設置位置よりもゴール地点に30cm近づけた位置に設置していた。

その際、自分たちで30cmをメジャーで計測してテーピングテープをレーンライン上に貼り、設置位置の目印にしていた。

- ③ 逆走の場合には、電気計時システムを使用することなく、研究にも使用されるハイスピードカメラにて撮影したレース動画を、PC上の動画再生ソフト(アプリ)で再生し、「スタート時のピストルの光(煙)が映ったコマ」と「フィニッシュのコマ」とのコマ数の差異から、走行タイムを算出していた。

上記の不適正行為に関しては、以下の事実も判明しています。

- ・ 上記③の方法による計時は、当時の監督の発案で始まった。
- ・ 実施当時の監督や担当コーチらにおいては、上記①～③の方法による記録が公認記録とはならないことを認識しており、これら指導者の判断で実行していた。

なお、少なくとも2019年以降は、上記①～③の方法は、他校の選手が参加する競技会では行わず、国際武道大学の選手だけが参加する競技会において行ってい

た。この点からも、不適正な実施方法と認識していたことが明らかである。

- ・ 上記①～③の方法で実施されたレースの記録を資格記録として、日本学生対校選手権大会等の大会に出場した選手もいた。中には、資格記録としては当該記録しか有していないにもかかわらず、当該記録を資格記録として出場した選手もいた。

言うまでもなく、上記①～③の方法による記録は公認記録ではありませんので、本件発覚後、判明している対象レースについては、公認記録の取消措置がされています。また、公認記録ではない記録を資格記録として本連合の主催競技会に出場したことが判明した選手の当該競技会における競技成績は、すべて抹消されます。

(2) 本連合における処分

上記行為は、競技会の主催者としての自覚と責任を欠き、陸上競技の記録に対する信頼を損なうものであり、誠に遺憾です。

ついては、本連合は、本連合の倫理委員会及び理事会の決定に基づき、本件について以下の処分を課します。

① 過去の記録の取扱い

本日（2024年8月29日）までに開催された国際武道大学主催の競技会における、同大学所属選手の100m、110mH及び男子混成競技の記録（逆走による実施か否かを問いません。）は、本連合が主催する今後の競技会において、資格記録として認めないこととします。

② 競技会主催の禁止

本日（2024年8月29日）から2年間、国際武道大学が競技会を主催することを禁じます。

③ 関係者に対する処分

各人の立場や不適正行為への関与の程度等を踏まえ、各関係者に対して以下の処分を課します。

| 対象者 | 処分の内容 |
|-------------------------------------|--|
| 元監督（2007年から2019年まで監督。 現在は他大学に所属） | ・ 本連合主催競技会への2年間の参加（来場を含む。）の禁止 ・ 日本学連における委員を解く |
| 総監督（2022年から監督） | ・ 本連合主催競技会への2年間の参加（来場を含む。）の禁止 |
| 障害（ハードル）担当コーチ | ・ 本連合主催競技会への2年間の参加（来場を含む。）の禁止 |
| 監督（2024年から監督） | ・ 本連合主催競技会への1年間の参加（来場を含む。）の禁止 |

2 競技会の適正な実施について

陸上競技は、記録のスポーツです。

ルールに則った正しい計測は、その大前提となります。公認された競技場で正しく実施される競技会において、共通の方法で計測がされることによって、場所や時代を超えて記録を比較することが可能となります。この大前提が崩れれば、陸上競技がスポーツとして成立せず、そして、陸上競技の魅力も失われてしまいます。

今回の事案に限られず、風速の測定やファウルの判定等についても、正しく実施される必要があることは、いうまでもありません。

記録会を開催する全国の各大学や、競技審判等を務める学生の皆さんにおかれましては、ご自身方が陸上競技の大前提を支えていることを改めて認識の上で、引き続き、正しい計測や判定に、常に意を払っていただきたく、よろしくお願い申し上げます。

以 上